

本当に“100mSv 以下の被ばくで、発がんする明確な証拠はない。”？



広報よこはま
特別号

震災対策特別号

放射線特集

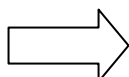
平成23年9月発行 発行：横浜市災害対策本部
 放射線対策部 ☎ 671-2470 FAX 664-7296
 ＊紙面中、電話番号に市外局番の記載がない場合、市外局番は横浜「045」です。



横浜市立大学大学院
医学研究科教授（放射線医学）
井上 登美夫 氏

？ 被ばくするとがんになるのが怖いのですが

現在、多くの方の関心事となっているのは将来の発がんの問題です。放射線は遺伝子や細胞を傷つける可能性があります。ほとんどの場合は傷ついた遺伝子や細胞は修復されます。いろいろな原因で修復されない場合、がんになる可能性が出てきます（これを確率的影響といいます）。少しでも被ばくと将来必ずがんになるわけではなく、放射線の感受性が高いとされている小児においても、100mSv以下の被ばくで、発がんする確率の変化について、**明確なエビデンス（根拠）**は得られていません。



「100 mSv 以下の被ばくで、発がんする確率の変化については明確なエビデンス（証拠）は得られていません」

横浜市の広報にもそんな記術がある。証拠がないから安全といえるだろうか。本当に証拠はないのだろうか。どうして「明確な」と書くのだろうか。

（横浜市広報「放射線特集」2011年9月より）

一般人年間1ミリシーベルの根拠

政府はこれまで一般人の被曝量を年間1 mSv としていた。毎時 0.114 μ Sv のところに一年いると年間1 mSv となる。事故前の横浜市は毎時 0.03 μ Sv。そう考えると年間1 mSv の大きさがわかる。その根拠は広島・長崎の原爆のデータに由来する。

国際放射線防護委員会（ICRP）は、累積で 100 ミリシーベルトの被曝をしたときに、致死性のがんが 0.5%つまり、「1000 人に 5 人」の確率で増えるとみる。ICRP は低い被ばくでも、リスクはあるというしきい値なしを採用している。1 ミリシーベルトでは「10 万人に 5 人」は我慢しようということ。だが、子どもは生涯での発がんの確率が大人の 2～3 倍高くなる。基準とは生物学的な安全値ではなく社会的に決められる「がまん値」と言える。

